

佐伯文庫公開展(上)

山 本 保

(会員・佐伯市池船町)

佐伯市立佐伯図書館(昭和五十六年十一月建設)開館五周年記念行事として、講演会(佐伯文庫について)別府大学文学部講師・梅木幸吉先生、佐伯文庫の献上について)佐伯国木田独歩会会長・狩生熊義先生)が、三月二十二日(日曜日)盛大に開催された。

ひきつづき、佐伯文庫公開展が三月二十四日から三十日までの一週間にわたって、催された。

その「しおり」の始めに、佐伯市長・佐々木博生さんの「ごあいさつ」が掲載されていた。

佐伯図書館開館五周年を記念して、この度「佐伯文庫」を市民のみなさんに公開する運びとなりました。

佐伯八代藩主・毛利高標(タカスエ)が、心血を注いで収集した多数の貴重な書物が、二百年という歳月を経て、今なお、佐伯市民のかけがえのない文化財産

として残されていることは、誠に意義深いことです。

今回の公開展を通じ、遠き江戸時代に繰り広げられた歴史ドラマに、思いをほせていただくとともに、今後とも、文化財保護に関する一層のご理解をいただければ幸いに思います。

八代藩主・毛利高標について

従五位下・和泉守(のち伊勢守)藤原朝臣・毛利高標は、幼名彦三郎、字は培松、霞山と号し、寛龍公とはオクリ名である。

母は、七代藩主高丘の夫人鳥居氏(下野・壬生城主・三万石・帝鑑間・譜代大名)で、宝暦五年(一七五五)十一月江戸に生まれ、同十年八月六歳で毛利氏を嗣ぎ、

八代藩主となった。

幼時、江戸藩邸（上屋敷）に儒者を招き、経・史を学び、安永二年（一七七三）六月、十九歳にして、初めて佐伯へお国入りを果たした。

英主の誉れ高く、教育・産業に示した業績は大なるものがあつた。

始めの頃は、幕府に於て、老中田沼父子が十代將軍家治の下に専横を極め、賄賂は公に行なわれ、天災起こり天明の大飢きんで、国民は困窮に追い込まれた時代であつた。

しかし、高標の晩年の頃は、松平定信が老中となり、十一代將軍家齊を補佐し、鋭意弊政を除き、政治を公明にし、儉約尚武の範を示し、財政を整理し、昌平校を拡張し、教育を朱子学に依らしめ、他の学派を禁じた時代であつた。

高標は自ら学問を好むのみならず、安永六年（一七七七）幕校・四教堂を起し、松下筑陰以下儒官を登用し東西の貴重書を集め、天明元年（一七八一）佐伯文庫を開いた。

これによって、文運はとみに高まり、幕末から明治に

かけて、達識の藩士を多数輩出することになった。

四教堂と佐伯文庫

寛政七年（一七九五）の春、若き広瀬淡窓（当時十四歳）は、恩師松下筑陰先生（四教堂教授）を慕い、日田から七泊八日の長い旅行で、やっと佐伯にたどりつき、五月間滞在し勉学に励んだ。

広瀬淡窓の「懐旧樓筆記」より

佐伯城下ハ海ニ浜（ヒン）シタリ。

浦ノ数凡ソ九十九浦ナリ。

土地セマシト雖モ、魚塩多ク士民富饒（フジョウ）

ナリ。

ソノ城ヲ鶴城ト号ス。

コノ時、佐伯侯（毛利高標）東都ニ述職シ玉ヘリ。

人ノ言フニ、君侯在ナラバ、必ず引見ノ事アルベシ

ト云ヘリ。

侯ハ好文ノ君ニテ、極メテ博聞強識ノ人ナリ。

佐伯蔵書ニ富ムコト海内無双ナリ。ミナコレ侯ノ求

メ貯ヘ玉ヒシナリ。

鶴城樓閣海之浜 松緑沙明不起塵

百浦魚塩民自富 風帆相接浪華津

城門二入りテ、ソノ左ニ学校アリ。

四教堂ト云フ。

この時代には、すぐれた大名が続出し、とくに近江・仁正寺藩主市橋長昭、鳥取・若桜藩主池田冠山そして毛利高標は、寛政時代の学者三大名と喧伝されたが、その学問の深さと蔵書数においては、高標を第一人者といわなくてはならない。

蔵書の質量は、加賀百万石の前田家に次ぐもので、わずかに二万石外様の小藩にして、八万巻と称される図書館をつくりあげたことは、一大偉業といえよう。

佐伯文庫は、中国（当時清国）からの輸入本で、唐・宋・元・明・清や韓国などの書物、ドイツ・イギリス・オランダの図書が含まれている。

高標は、清国船が長崎に入港するたびに、書物奉行・関谷善左衛門儀を出張させて、優良図書を多量に購入している。

その図書は、

経部―易・書・詩・春秋・礼・孝經・五經・四書・

論語・孟子・小学など

史部―正史・通史・編年・約史・史抄・史評・伝記

地理・雑史など

子部―儒家・道家・釈家・諸子・農家・小説家・兵

家・天文家・医家など

集部―詔制・章疏・辞賦・總集・余集・別集・詩文

そして評類など

このように、あらゆる学問の分野にまたがる木版唐書であった。

また、西洋の植物書（ドイツ人原著）、貝類集（フランス人原著）、魚類の歴史（イギリス人原著）、自然学原理（オランダ人原著）、新精撰外科学（オランダ語訳書）など、すぐれた舶来書もあった。

天明・寛政時代は、毎年のように大洪水・ひでり・凶作・大飢きん・疫病流行が続き、藩の財政事情も悪く、儉約令（二百石以上半知行、以下これに準ずる）が出されていた。このむずかしい条件のなかで、あたいた数千金といわれる良書を買入れられたため、二万石の藩庫は傾くまでになったと伝えられている。

高標の経済政策

明和三年（一七六六）勘定頭・矢野安太郎、川野孫四郎監督、塩屋村女島を開拓して、水田四十二町六反の新田をつくった。

安永三年（一七七四）江戸の柳沢大炊介献納の蛭子（エビス）像九体を、四浦・千怒・浪太・日向泊・羽出・沖松浦・浦代・畑野浦・名護屋に安置して、豊漁を祈った。

漁獲高の最も多かったのは、いわしで、これを煮てしぼり、その汁から燈油を採取し、また、そのカスを日光にさらして、農業用肥料とした。

秋から冬にかけては、目刺し・唐人乾しを製造した。

さらに、ほしあわび・みがきするめ・いりこ・ふかのひれ・貝柱などは、幕府の命令で毎年長崎に輸送し、清国との貿易品となっていた。

安永八年（一七七九）高標夫人の実家（伊予・大洲藩主加藤遠江守・六万石）から、和紙作りの熟練工を招へいして、因尾・中野・上野・切畑・上直見・下直見などで講習会を開き、奨励した。

これによって、紙質がたいそう立派なものを産出するようになり、一大飛躍をとげ、販路もひらけ、毎年十万束を大阪方面に輸出し、「佐伯半紙」の声価を挙げるこゝとができた。

後年（文化七年）沿岸測量のため、佐伯に来藩した幕府の伊能忠敬一行に贈り物として、半切紙を多量に進呈したこともよつても、理解することができる。

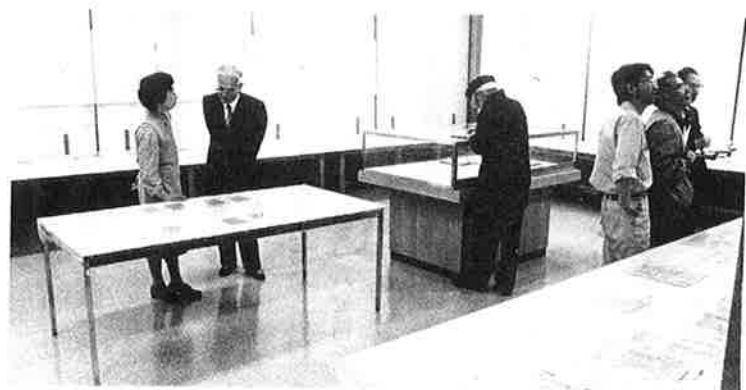
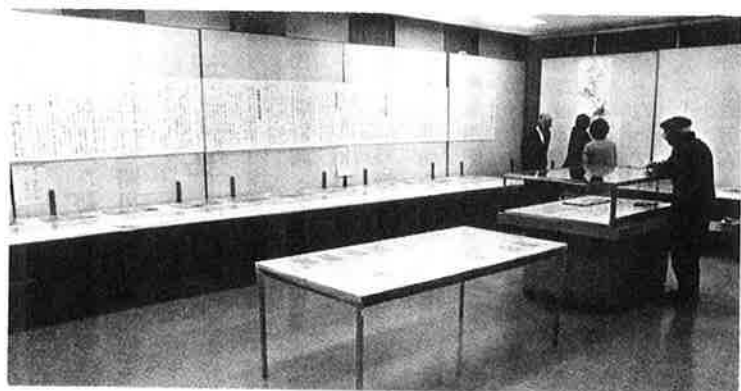
寛政五年（一七九三）杉苗二万株を山野に移植した。その翌年、向島に「諸木植付所」を開設して、ハゼ苗を育て、領内全域に植えさせ、大阪資本を導入しながら、その実から沢山のローソクを製造した。

佐伯文庫幕府へ献上

かくして、十代藩主毛利高翰（タカナカ）は、文政十一年（一八二八）三月佐伯文庫八万巻の中から、優良図書二万巻余りを幕府に献上した。

幕府は、これを昌平校（最高学府）および江戸城内の紅葉山文庫に分納め、佐伯藩には、馬具（鞍・籠）梨子地・牡丹唐草・政有作）一背分、時服（白羽二重・黒羽

佐伯文庫公開展会場（佐伯市立図書館）



二重・花色羽二重・御納戸茶縷子・黒紗綾・黒綾など、

いずれも菱御紋付き）一〇を賞として下賜された。